

國學院大學學術情報リポジトリ

若狭のニソの杜の祭地と水源

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関沢, まゆみ, Sekizawa, Mayumi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000580

若狭のニソの杜の祭地と水源

関沢まゆみ

一、ニソの杜の研究史と現在

国記録選択無形民俗文化財『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書』^①及び『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書—資料編—』^②が二〇一八年に刊行され、翌二〇一九年に大島半島のニソの杜の習俗調査報告書刊行記念公開シンポジウム記録集『ニソの杜と先祖祭り』^③が刊行された。

若狭大島のニソの杜は、民俗学が早くから研究関心をもってきたものであるが、この報告書により、大島にある約三〇か所

のニソの杜の悉皆調査によって、立地と祭祀、杜の植生などが写真とともに記録され、二〇一七年の時点でなお杜が維持されていることがわかる。また、橋本鉄男「ニソの杜」^④の一九六〇年の調査から五〇年余りを経て、祭祀が廃絶されている杜が八か所あるほか、ニソの杜を祭る家数の減少など、祭祀の縮小化は指摘できるものの、多くの杜で祭祀が継承されていることもわかる。^⑤

ニソの杜については、昭和一四年（一九三九）の安達一郎「若狭大島探訪記」^⑥、昭和一九年（一九四四）の鈴木棠三「若狭大島民俗記」^⑦、そして、安間清の昭和二五年（一九五〇）「ニソの

杜⁸⁾」と昭和二七年(一九五二)「ニソの杜」調査⁹⁾、先に述べた昭和三五年(一九六〇)の橋本鉄男「ニソの杜」などの報告が早い段階のものである。

そこでは、大島在住の島山神社の神主や村長を務めた人物で、現地の研究者でもあった大谷信雄(一八六六—一九五七)の見解、つまりニソの杜は二十四の宗家の祖神を祀ったものであるという説が前提とされており、また、柳田國男が昭和二四年(一九四九)一〇月と昭和二五年(一九五〇)三月の安間清宛¹⁰⁾の書簡で、ニソの杜の祭りが一月二三日であることからして祖霊の祭りであろうなど、ニソの杜は、一般の郷村の氏神に先行しかつその基本としての先祖を祭る杜ではないかという示唆を与えたことから、研究者の関心が集まっていたといえる。

しかしその後、昭和三九年(一九六四)の東京教育大学の民俗調査団による『若狭の民俗』の調査で、直江廣治「ニソの杜」信仰とその基盤¹¹⁾、は、「ニソの杜」が古くから現地で使われてきた民俗呼称ではなく、村人は通例「もりさん」「もりの神様」人によつては「地の神さま」と呼ぶこともあることを指摘し、福田アジオ「若狭大島の村構成と親方子方制度」¹²⁾も、事実上、二十四名の家が存在しないことを指摘した。直江はまた、小祠に納めてある神札に、「地主大神」「遠祖大神」「地神」「荒神」

「山之神大明神」などあることから、遠祖をまつるとする信仰と、地神系統ないし荒神をまつるとする信仰とが併存してきたものと考えられるとした。さらに、ニソの杜は先祖をまつる杜だというのを前提とせず、若狭地方はもろん広く地の神系統や荒神系統の類似した信仰との比較研究が必要であるとの指摘もしている。そして、ニソの杜の立地の基本は、人家群に近く宗家の屋敷続き、とくに裏山の山裾であるが、人家群からへだたつて小さな谷の頭、山の尾根の末端に位置するものも多いことについては、もとは屋敷神であつた可能性があること、それが近世に入つて沿岸漁業の発達に伴つて民家が山添いから移動してきたためという先の安間清「ニソの杜」調査¹³⁾の移動説と同じ説明をしているが、その資料的根拠は示されていない。

その後、佐々木勝「ニソの杜」祭祀の変遷¹⁴⁾は、大谷信雄家に保存されていた「にそ講関係帳簿之写」に、「安政六年己未年 五月吉日 地ノ神入用割帳」とあることから、大谷家が祭祀を行なつていた瓜生の杜や清水の前の杜では、地ノ神としてまつられていたが、後に有力な個人による祭祀、同族祭祀へと変遷していったという仮説を提示した。

一方、金田久璋「ニソの杜と若狭の民間信仰」、同「祖霊信仰」、同「杜の神と開拓先祖」¹⁵⁾は、ニソの杜は先祖をまつるのが基本

であり、そのことを若狭地方から京都府下、滋賀県下へと、ダイジョコ系、地の神系、杜神系の信仰伝承を広く対象として比較していく中で指摘している。

このように、現地の大島以外に視野を広げて、若狭地方一帯の同類事例として三方郡のダイジョコ系、大飯郡や遠敷郡の地の神系などの調査を関連させて、ニソの杜で祀られる神についてその基本は地の神という解釈と、先祖神という解釈というものまったく異なる両者が提唱されたのであった。しかし、いずれも大島のニソの杜の現地調査の事例情報は少なく、他の地域の情報からの援用と類推が多い点で問題があった。

また、昭和五四年（一九七九）に営業開始の原子力発電所の建設による大島の変化の中でニソの杜に注目したのが、李春子「大島半島のニソの杜と住民の変容から見る伝承の考察」⁽¹⁸⁾、同「ニソの杜祀りの現在——大島半島の事例を中心に」⁽¹⁹⁾である。それは、大きな環境変化と社会変化の中で二〇〇〇年当時の調査情報であった。

このニソの杜の調査と研究があらためて進展したのは、平成二二年（二〇一〇）三月の文化庁による国の記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財への選択と、それにともなう福井県大飯郡おおい町による平成二七年度（二〇一五）から三年間

の調査事業によつてであった。その成果が、前述の『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書』（二〇一八年）、『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書——資料編——』（二〇一八年）、『ニソの杜と先祖祭り』（二〇一九年）によつて公開された意義は大きい。

民俗学に限らないが、多くの研究者が注目する学術的な研究テーマというのは時代とともに変化していく傾向がある。そして、人文科学の場合、未解決で残された問題がありながらそれが放置されたまま、新しい研究の必要性和研究関心が提唱されることも少なくない。そうした中に埋没してしまいかねなかった若狭のニソの杜という研究テーマの調査研究が、こうして実現したことは、民俗学史の上でも意義のあることであつた。

そして、その今回の調査によつて、①ニソの杜の研究史が詳細に再確認されたこと、②ニソの杜の事例約三〇カ所のすべてが植生を含めて現地確認されたこと、この二つは貴重な成果であつた。①では、とくにこのニソの杜の研究史の上でもっとも注目されながらも印刷刊行されておらず誰も読むことができなかった現地居住の研究者大谷信雄の手書きの稿本「島山私考」の全文がはじめて確認された。それによれば、大谷は「にその杜」の記述では「一、祭神、大地主神 遠祖大神」と記している。ただし、それに続く「口碑」の部分の記述では、「其ノ一

にその神は志摩の元祖に坐まして二十四名の宗家各別に小祠を建てて我家の遠祖を祀りこれをにその神と尊称し奉るなり」と記しており、これが昭和三〇年代までの当初のニュースソースであったことが確認された。②では、従来の研究がいずれもニソの杜の一部の調査情報だけで論じられていた点が克服されて、すべての杜が現地調査されたことは貴重であった。今井三千穂「各杜の植生分布の概要」²⁰⁾は、ニソの杜の植生を個別にすべて調査し樹種とその胸高直径とを示しており、タブノキのほかスダジイ、ヤブツバキ、そして孟宗竹などが杜の景観をつくってきていることがよくわかる。タブノキの古株からは新たな芽が出て成長をしていることもわかる。また、現在の祭祀についてその研究成果が集約されているのが、とくに③「ニソの杜と先祖祭り」収録の論文である。²¹⁾その要点をまとめてみれば、以下のとおりである。

1. まつり手は、単数と複数との両者があるが、まつるのは年毎に順番に当たっている家が単独で、新しくする注連縄や御幣などの設えもアカメシ（小豆飯）とシロモチ（桑）などの供物もすべて自分の家のやりかたで行なっている。つまり共同祭祀ではないのであり、血縁の同族祭祀でもなく地縁的地域社会の祭祀でもない。また、その後の筆者の二〇一九年の調査でも、

家で葬式があった場合、一月二三日の祭りを行なうか行わないかも、それは家ごとの判断に任されていた。四十九日前から今年はやめておこうという家もあれば、三年くらい祭りを遠慮している家もあるということであった。

2. まつり方の内、まず①供物は、古くはニソの杜に付属しているニソ田の収穫物である稲米と稲藁を供物の中心としてきたが、しだいにニソ田が耕作されなくなり、近年はまつりの当番の家の水田から収穫される稲米と稲藁が使われている。稲米はアカメシ（小豆飯）とシロモチ（桑）に加工されて供物の中心となっている。供物に箸はそえない。ニソ田が耕作されなくなったのは、大飯原子力発電所の誘致が昭和四四年（一九六九）に町議会で決議され、その一〇年後の昭和五四年（一九七九）の営業運転開始に向けての青戸大橋の架橋や道路建設、海岸部の埋め立て工事、圃場整備などの土地改良工事等々にともなう大きな環境変化や社会変化の中での変化であった。

次に②装置としては、収穫された稲藁が、杜のタブノキの巨木の根元の小祠へ掛ける注連縄とアカメシとシロモチを容れる藁ツトの材料に使われている。他に御幣とミテグラ一二本が立てられ、外海の浜から拾ってくるゴイシ（きれいな浜石）が敷かれる例も、海藻が敷かれる例もある。

次に③祭日は、旧暦霜月二二日から二三日に日付が変わる夜陰、浄闇のなかでひそやかに家の夫婦が親子だけでお参りする。手を合わせるだけで拍手は打たず祝詞や祭文など唱え言は一切ない。祭日以外は決して近づいてはいけない。樹木の伐採や枝葉の片付けもしてはならない。この禁忌をおかすと怪我をしたり病気になるという、そうした例も語り継がれている。つまり、以上の、2. まつり方、からみての結論は、ニソの杜のまつりとは、重い忌みの中での新穀感謝の新嘗にいなめの祭りであり、折口信夫の学説を参考にすれば「にへの斎」の祭りである。

3. ニソの杜の立地については、二つのタイプがある。①集落の内部や近接の立地というタイプと、②山裾など耕作地と山林との境界的な場所にまつられているタイプである。②はC. レヴィ・ストロースのいう「自然・野生」と「人間・文化」という関係論で解釈できるところのいわば境界的な立地である。それに対して、①は開発が進み人びとの居住が進んだ中でもそのエリアにタブノキの巨木がそびえ立っている杜に対して自然の靈威力を感じた人たちが禁忌の対象として残し畏れ敬いまつってきたものである。地の神や先祖の神というのは伝承の過程でいわば上書きされてきたいずれも新しい解釈であり、ニソの杜の信仰対象の基本は自然の靈威であり神威である。

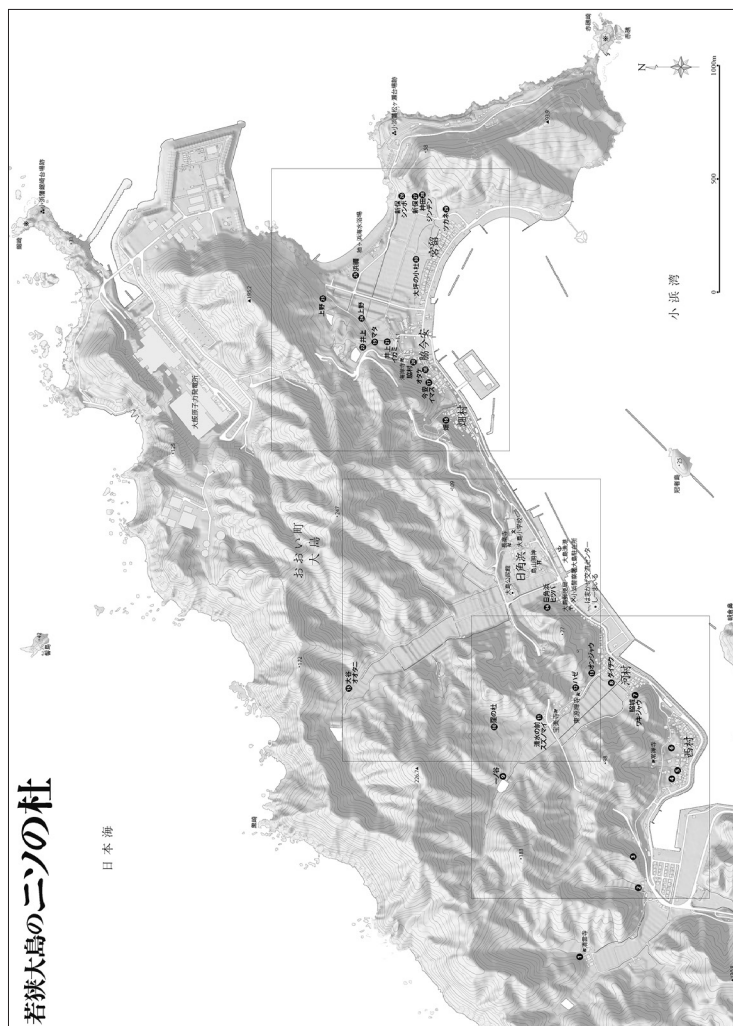
およそ以上が、『ニソの杜と先祖祭り』収録の論文で提示された調査研究の成果としての要点であった。そうして今回、約三〇カ所のニソの杜の現地調査が実現しながらも、まだ残されている課題の一つといつてよいのが、ニソの杜の立地の問題である。

これまで、ニソの杜が集落内に立地している事例と現在の集落から離れた谷の奥や山の斜面に存在する事例とについて、両者に分けてその解釈が試みられてきた。後者については、集落移転という仮説や、C. レヴィ・ストロースのいう「自然・野生」と「人間・文化」という関係論での解釈がなされているが、集落移転説には根拠が乏しく、境界論はやはり抽象的な解釈論ではないかと思われる²³。そこで、筆者も二〇一九年一月にニソの杜の立地について谷の奥や山の斜面に集落から離れている事例も含めて、あらためて現地調査を試みた。そして、それによつて得られた仮説的な見解を重要な点と考えるのでここに提示しておきたい。

(1) ニソの杜の立地の2つのタイプ

山裾にというのが、西村の瓜生③、宮留の新保②⑦、神田②⑧はるか遠く離れた山の中や耕作地と山の境目あたりというのが、河村の一ノ谷⑨、窪⑩、日角浜の大谷⑮、脇今安のマタ⑰、井上①⑲、井上②⑳、上野①㉓、上野②㉔、集落から遠く離れた耕作地のはずれというのが、宮留の浜欄⑵、新保①㉔である。これらの伝承事実について、先の『ニソの杜と先祖祭り』で提示されていたのは、前述のように「自然・野生」と「人間・文化」という関係論でありそれは境界論的な解釈であった。しかし、あらためて地図と現地とを確認してみると、西村、河村、日角浜、脇今安の四地区については、集落へとつながる北側の谷の奥にニソの杜が位置していることが共通している。西村では①、河村では⑨、日角浜では⑮、脇今安では⑲、⑳および㉔そして㉔である。そして、⑨、⑮、㉔、㉔の近くには溜池がみられる。今回、原子力発電所に近い㉔以北の現地調査はできなかったが、⑨、⑮の現地調査によりそれにかわる仮説を以下で提示してみることにする。

まず、集落から遠く離れた場所に立地しているニソの杜の事例として、先の『ニソの杜と先祖祭り』では調査年度には忌中



地図 1 大島の全図とニソの杜の立地

ということでもつりが行なわれず、調査情報の記述が乏しかった日角浜の⑮の大谷の杜の現地調査を行なってみた。日角浜の集落から山麓を北西へ、約1kmのところにある。昭和一九年



写真1 ⑮大谷の杜 タブノキと湧水と供えられた注連縄と供物 (2019年11月23日)。タブノキの根元から泉水が湧き出ており、そのそばに小さな注連縄が施され、白い陶器の皿にシロモチ、ニンジンなどが供えられていた。

(一九四四)の鈴木棠三の調査⁽²⁾によれば、その⑮大谷の杜とは畑村の庄司義男家のまつる杜であつたが事情により現在では畑村の上本家がまつっている、昭和一九年(一九四四)当時は太い孟宗竹の藪と一丈(約三m)余りもあるタモの太木が茂っていると言われているが、二〇一九年の現状ではそれは大きく変貌しておりそのような景観ではなかった。樹木の寿命の短さと植生の変化の激しいことをあらためて考えさせられた。

ただ、現在もそれほど太い大木ではないがタブノキ(胸高直径一〇七cm⁽²⁾)は立っており、その根元に小祠はないが小さな注連縄が施された下にシロモチや大根、ニンジン、昆布などの供物はなされている。そして、何よりも注目されたのは、そのタブノキの根元が一つの水源になっており、そこから小さいながらも泉水が湧き出ていることであつた。それがわずかな小川となつて日角浜の広い耕地へ向けて流れ出ているのであつた。

そこで、次に調査したのが、河村の⑨一の谷の杜であつた。そこもすぐ近くに現在では農業用貯水池が作られており、水源地の近辺であることが指摘できる。そしてそれは河村の広い耕地へと向かう用水である。同じく農業用貯水池に近い脇今安の②井上2へも調査を試みたが、その場所は現在では原子力発電所の入口近くで立入り禁止のため残念ながら直接の確認はでき



写真2 ⑦脇城の杜。手前が井戸（2019年）

なかった。さらに、宮留の観音堂の裏の山の斜面にある②神田（ジンデン）の杜も水源地に立地しており、そこから水田の用水として活用されてきた湧水が流れ出ている。

このように山際の湧水や谷の水にそっているというニソの杜の立地について同じく指摘できるのは、脇今安の、⑬マタの杜、⑭井上の杜1、⑮井上の杜2、⑯上野の杜1、⑰上野の杜2、また宮留の、⑱新保の杜1、⑲新保の杜2、⑳神田の杜、㉑ツカネの杜、などである。

一方、集落の内部やすぐ近くに立地しているニソの杜についても調査を試みてみた。すると、脇今安の⑯今安の杜は明らかに生活用水の湧き出る水源近くにまつられていることが指摘できる。杜の樹木はいまではエノキ（胸高直径七〇cm^㉒）で、その根元に小祠がある。ここの井戸は、昭和四〇年代に大島に上水道が普及するまでは、近隣の一五軒の家々が共同で利用してきたものであった。もうこの井戸は使われていないが、水はいまでも湧き続けて池になっており少しずつ流れ出ている。

もう一つ、屋敷近くで井戸の近くにまつられている杜の例として注目されたのは、⑦脇城の杜であった。河村の南西の外れに位置し、民家の裏山の斜面に小祠がまつられている。もとはタブノキとムクノキがあったといわれるが、いまでは伐採されている。この斜面のすぐ下に井戸がある。

また、⑨一の谷の杜で前述した、河村の集落の例でみてみると、⑪清水の前の杜は河村の集落の北に位置しており、孟宗竹林内にありタブノキの古株（胸高直径九〇・七五cm^㉓）がある。その杜のカラスグチと呼ばれる供物の場所がいまでは原免道路に隔てられて手前のケヤキ（胸高直径一〇二cm^㉔）の根元にある。橋本鉄男「ニソの杜」^㉕は、この⑪清水の前の杜について、その前の畑に古井戸があり、そこがこの杜をまつっていた大谷信雄

家の屋敷跡だと注記している。その屋敷跡だという件は大谷信雄の語りによると思われ具体的な根拠はない。しかし、ここに古井戸があったことは注目される。それは先の脇安の杜、脇城の杜と共通しているものといえる。そして、この⑪清水の杜の場所から河村の東の集落へと下っていく谷筋の西側の山裾にまつられているのが、⑫ハゼの杜、⑬オンジャウの杜である。いずれも地図をみてわかるように谷筋の水の流れに沿って立地しており、地元の人からも谷筋の水の流れに沿っているという話を聞いた。それは、水源としては農業用というよりは生活用水としてのものであったと推測される。それらにもカラスグチが付属しているが、そのカラスグチというのは、ニソの杜のタブノキの巨木の根元の小祠の近くで、それとは別に同じく供物のアカメシとシロモチを供えるものである。カラスなどがその供物を早く食べればよいと言い伝えている。それは、⑪清水の前の杜、⑫ハゼの杜、⑬オンジャウの杜、の他にも、⑭日角浜の杜、⑳脇の杜、㉓上野の杜、㉔大坪の杜などにみられる。

(3) 島嶼部・半島部の水の苦勞

この若狭大島は、昭和四四年（一九六九）の原子力発電所の建設誘致以降、人びとの生活が大きく変化した。上水道の整備

もその一つである。日本各地で、島嶼部や半島部における水をめぐる苦勞は、今も語られている。たとえば、三島由紀夫の小説『潮騒』のモデルとなった島、三重県鳥羽市神島の調査のときいろいろと協力いただいた藤原喜代造さん（昭和十一年生まれ）は、子供のころ、顔は片手で洗ったという。両手で水をためるほどはなくて水がもったいなかったからである。このような体験は、田辺悟『潮騒の島』⁽³⁰⁾にも書かれており、神島の子供は顔を片手で洗うという記述がある。昭和四五年（一九七〇）に海底に送水管が敷設されて島の上水道が完備されたが、藤原さんは、その当初、水をザーザー流しながら洗い物などをしていてもつたない様子を見て、「身が切られる思い」だったという。

また、古い由緒を誇る美保神社が鎮座する島根県松江市美保関町美保関は、近世には北前船の寄港地でもあり、小泉八雲『日本瞥見記』も紹介する「関の五本松」の民謡で知られてにぎわった港であった。集落の中心にある美保神社の参道には、「おかげの井戸」があり、今も汽船や航空機などの交通安全や海の安全と豊漁祈願の漁業関係者の信仰を広く集めている。赤い鉄水（かなみず）しか出ないといわれるこの美保関で、この井戸だけはきれいな清水が湧き、枯れることがなかったといわれている。

る。地元の三角邦男さん（昭和一四年生まれ）は、ふだんお風呂の水も鉄水だったが、子供に「今日は本当の風呂に行つたもてやる」といつて、たまには特別に境港の風呂屋に行つたものだという。昭和四六年に境水道大橋が開通し、鳥取県境港市と美保関町との間で、こちらに火葬場を建設する代わりに境港から水道を通すことになって生活用水の不便が解消されたという。このように、日本各地で現在のような水道が開通するまでの半島部や島嶼部の歴史の中では水がひじょうに貴重であったことがわかる。水の恵みと水への信仰はこの大島の生活の歴史の中でも共通するものであったことと推察される。

三、小括

ニソの杜の研究史に学びながら、この小論で仮説的に提示しておくことのできる点は以下のとおりである。

ニソの杜の立地には二つのタイプがある。一つは、集落の内部や近接地というタイプ、もう一つは、集落からやや離れた耕作地と山との境界というタイプである。いずれもこの大島という半島部での生活で歴史的に貴重であった水資源への受容と供給という観点からすれば、それらは水源とその近くに自生する

自然のタブノキの巨木と叢林への畏敬の念にもとづくものであったと考えられる。

集落の内部に立地するタイプでは、⑦脇城の杜、⑰今安の杜、など井戸のそばの杜の立地によって示されているように、生活用水としての恩恵への畏敬の念がその基本にあったと考えられる。また、集落から離れた耕作地と山の境界に立地するタイプは、⑨一の谷杜、⑮大谷の杜、⑳井上の杜、㉑神田の杜など、谷の奥にある湧水や溜池に近接している杜の立地によって示されているように、農業用水としての恩恵への畏敬の念がその基本にあったと考えられる。

そして、脇今安の、⑲マタの杜、㉑井上の杜、㉒井上の杜、㉓上野の杜、㉔上野の杜、はいずれも山際の湧水との関係が指摘できる立地であり、宮留の、㉕新保の杜、㉖新保の杜、㉗神田の杜、㉘ツカネの杜、も同様である。農業用水との関係があった可能性がきわめて高い。そのほか、現在では水源とは明確に結びつかないような立地の杜でも、長い歴史の中でそれが見えにくくなってしまったという可能性もある。たとえば、⑮オタケの杜の前に立つと水の流れる音がいつも聞こえる。現在の地形からは見えにくいだが、水源祭祀の可能性がある杜の一つと考えられる。したがって、それらの事例の情報を

追跡する必要性は残されている。しかし、ニソの杜の祭祀が水源と強く結びついているという事例が確実に存在することが確認されたのであり、神聖なニソの杜の立地に水源への信仰があったということはここに指摘しておくことができる。

注

- (1) おおい町立郷土史料館編『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書』おおい町教育委員会 二〇一八年
- (2) おおい町立郷土史料館編『大島半島のニソの杜の習俗調査報告書—資料編—』おおい町教育委員会 二〇一八年
- (3) おおい町立郷土史料館編『ニソの杜と先祖祭り』おおい町教育委員会 二〇一九年
- (4) 橋本鉄男「ニソの杜」『近畿民俗』二六、一九六〇年
- (5) 脇今安の集落から北に約一km離れた山裾に②上野の杜がある。この杜をまつる大屋さんは、父親から引き継いだとき、最初はなぜこんなことをやるのかと思っていたという。しかし、何年か祭りをしているうちに、「この杜の木は何十年もそれ以上も前から立っている」ということに気づき、祭りをしていくことの意味を自分なりに知ったという話をしてくださった。
- (6) 安達一郎「若狭大島探訪記」『南越民俗』二四、一九三九年
- (7) 鈴木棠三「若狭大島民俗記」『ひだびと』一二・三四・五合併号、一九四四年
- (8) 安間清「ニソの杜」『民間伝承』一四—二(千葉徳爾記述)、一九五〇年

- (9) 安間清「ニソの杜」調査『民俗学研究』三、一九五二年
- (10) 安間清「柳田國男からの書簡」大和書房 一九八〇年
- (11) 直江廣治「ニソの杜」信仰とその基盤『若狭の民俗』吉川弘文館 一九六六年
- (12) 福田アジオ「若狭大島の村構成と親方子方制度」『若狭の民俗』吉川弘文館 一九六六年
- (13) 前掲注9
- (14) 佐々木勝「ニソの杜」祭祀の変遷『日本民俗学』一二、一九七九年、後に『屋敷神の世界』名著出版 一九八三年
- (15) 金田久璋「ニソの杜と若狭の民間信仰」『歴史手帖』五 名著出版 一九七九年
- (16) 金田久璋「祖霊信仰」『講座日本の民俗学 神と靈魂の民俗』雄山閣 一九九七年
- (17) 金田久璋「杜の神と開拓先祖」『森の神々と民俗』白水社 一九九八年
- (18) 李春子「大島半島のニソの杜と住民の変容から見る伝承の考察」『社会システム研究』四 京都大学社会システム研究刊行会 二〇〇一年
- (19) 李春子「ニソの杜祀りの現在—大島半島の事例を中心に—」『日本民俗学』二二〇、二〇〇二年
- (20) 今井三千穂「各杜の植生分布の概要」前掲注2所収
- (21) 新谷尚紀「ニソの杜とは何か—これまでの日本民俗学の取り組みと、今回の調査結果からの報告—」前掲注3所収
- (22) 折口信夫「大嘗祭の本義」『國學院雑誌』三四卷第九・一〇号(一九二八年初出)、『折口信夫全集』第三卷 一九五五年
- (23) この解釈は、中国山地の荒神について(新谷尚紀「遊びの深層」『ケガレからカミへ』木耳社 一九八七年、また藤井昭「近世前期備北地方における荒神名の存在形態」『広島県史研究』二(一九七七年)

において、備北地方の荒神と呼ばれる祭祀対象が、人為的な開発がなされたところと未開拓の自然との境界にあることを指摘していることにも共通している。

(24) 前掲注7

(25) 数値は前掲注20による。

(26) 数値は前掲注20による。

(27) 数値は前掲注20による。

(28) 数値は前掲注20による。

(29) 前掲注4

(30) 田辺悟『潮騒の島』光書房 一九八〇年

【付記】

このたびの調査では、おおい町立郷土史料館主査の川嶋清人氏にたいへんお世話になりました。ここに記して厚く御礼を申し上げます。